

視覚障がい教育の専門性形成と海外交流 ～ 過去 現在 将来 ～

小野寺学園明日佳幼児教育専門学校 校長 鈴木 重 男

I はじめに

本稿は、視覚障がい教育の専門性を形成する初期段階に、台湾の統合教育を視察して学んだ「通常の教育課程に視覚障がいに基づく困難さを解決するための指導内容・方法＝プラス・カリキュラム」の考え方や、統合教育にかかわっていた巡回指導教師の方々の情熱と研究心を、自身の教師のあるべき姿として、胸に刻んで過ごした教師初期5年程度までの間の教育実践や、その後の専門性の向上の状況、また、奉職40年から退職後での視覚障害教育の専門性を生かした韓国及び台湾、モンゴル、タイでの海外でのボランティア活動を整理して、最後に人生100年といわれる現実を踏まえた今後の生き方を模索したものです。

表1 奉職から5年までの自主的研修

1970年4月	北海道札幌盲学校奉職
1971年4月	「養護・訓練」の開始、文部省指導者講習会に参加 中途失明者への点字触読と盲児への歩行指導を自主的に研究
1972年7月	感覚訓練士養成講習会で、台湾の統合教育を知り、世界盲人百科事典を購入(当時、1万円 今の約5万円)
1973年3月	台湾に自主的視察(1回目)
1975年3月	3回目自主的視察を経て、同年、盲学校中学部卒業生の高校統合教育

表2 奉職40年から退職後のボランティア活動の概要

2009年10月	国立ソウル盲学校、光州女子大学、韓国特殊教育学会秋季大会基調講演 以後、韓国内盲学校等特殊学校、大学、福祉機関、視覚障がい教育や発達障がい教育学会等で講演・講義
2017年2月	モンゴル国立第116番学校(視覚障がい学校) 3日間の校内研修
2018年7月	台湾3区分の担当教師研修 翌2019年1月:盲スポーツの研修
2019年2月	タイ バンコク盲学校 全国視覚障がい教育担当者研修
最直近2022年1月	韓国カトリックサンジ大学 日本の医学・福祉の歴史 WEB講義

このようなことから、本稿は、一盲学校教師の専門性の形成期から、専門性を活かした教師としての児童生徒への本格的指導期、学校教師を終えた後の海外での専門性を活用したボランティア期を通じた事例的な内容を整理したものです。

II 視覚障がい教育の「魂」を台湾に学ぶ

台湾の台中教育委員会には、1973年3月、事前通告なしに一人で出向きました。それは、前年、1972年7月、大阪の日本ライトハウスで開催された厚生省主催「感覚訓練士養成講習会」

で、台湾で当時実施されていた統合教育(盲児が地元の普通学校に通う教育システム)のことが紹介され、台湾の統合教育を詳細に記述している世界盲人百科事典(日本ライトハウス編纂・発行)の購入を勧められたことによります。私は、早速、同事典を購入し、台湾の統合教育を調べたところ、当時の中華民国台湾省政府のあった台中市が最も充実していると記してあったからです。

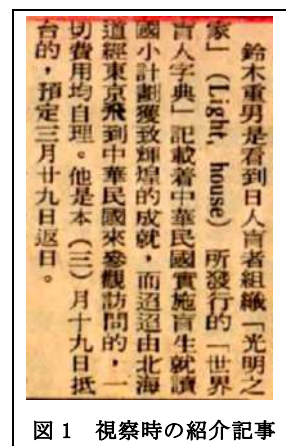


図1 視察時の紹介記事

私は、台中市教育委員会に出向いて、日本語の分かる方(戦前、日本人として教育を受けていた方)として、林校長先生を紹介され、また統合教育が実施されている各学校を巡回して、盲児の特別なニーズに応じた指導を行う巡回教師を、さらに指導する立場の韓先生

も紹介されました。



図2 台南駅での韓先生と私

韓継綏先生は、台中市以外の近郊の学校に出向くときは、私をオートバイの後ろに乗せてくれました。また、台南市や高雄市等の他都市には車で移動して、約8日間、台北市以外の各地で行われている統合教育の現場を視察することができました。

私は、このような台湾の統合教育の視察を3年間続け、林校長や韓先生の他に多くの知己を得る

ことができました。

だが、岩間君の普通高校での生活が、このように困難に進むには関係者の隠された努力があった。まず、札幌盲学校の担任だった鈴木重男先生が、北星学園男子高校の近くのアパートに、岩間君と移り住んで、岩間君といっしょに入学した調子の生徒と三人で共同生活をはじめた。鈴木先生は、二人の朝食と昼の弁当をつくらせてから左別の学校へ出勤、夜は夕食をつくる毎日を送っている。

図3 岩間さんとの同居生活

台湾で学んだ盲児の統合教育は、当時勤務していた北海道札幌盲学校の教師や児童生徒にも伝えました。

生徒の中には、自身も普通高校で学んでみたいと希望する生徒が出てきて、当該生徒の保護者も希望したいと申し出てきました。

岩間勝美さん(北星学園大学卒業、現在も日本赤十字札幌点字図書館に勤務)は、琴似駅の近くにあった札幌北星男子高校に通常の生徒と同様の点訳した入学試験を受けて入学が決まりました。彼は、とても利発でまじめな生徒でした。

しかし、同校で使用する全ての教科書は、点字化されていませんでしたので、当時の北海道札幌盲学校中学部の教師が手分けして点訳しました。また、北星男子高校学校では、授業で副教材として、普通文字プリントが配られて使用されるので、その点訳も必要でした。そのこともあり、私は、1年間、岩間さんと学校のすぐそばのアパートに同居して、このプリント類の点訳と朝食や昼食の弁当の支援を行いました。

1. 身體之各面：了解身體之側面，前面及後面等。
 2. 身體之部位：知道身體各部位名稱、位置及功能。
 3. 身體之動作：軀幹之活動及四肢等之活動。
 4. 左右之概念：除了解身體左右部位外，還要能分辨左右方，並指出正左、正右之能力。

図4 劉信雄先生の翻訳

台湾の統合教育の視察で、何よりも大きな収穫は、盲児の歩行指導概念の中核といえるボディイメージ概念を国立台南師範大学啓明苑(巡回教師養成等統合教育推進センター)発行の機関誌で知ったことです。劉信雄先生

(後に同センター教授)は、米国 B. J. Cratty の「Body Image」の論文を中国語に翻訳した内容でした。当時の日本では、ボディイメージという言葉は、肢体不自由教育の専門用語として使用されていました。

しかし、私は、盲児の歩行指導における心的地図(メンタルマップ)指導の中核概念は、このボディイメージ形成を基盤にすべきと気付きました。

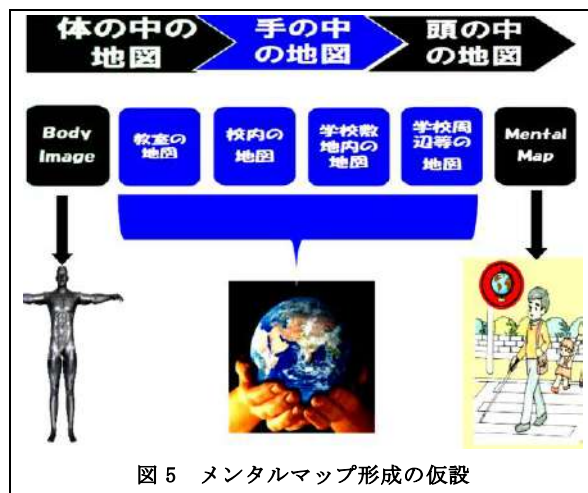


図5 メンタルマップ形成の仮説

盲児の取り巻く空間環境の把握は、ボディイメージを空間に投影することができる力(メンタル・ローテーション能力)により可能になるとの仮説でした。この仮説を踏まえて、空間環境を「ボディイメージ」「教室内の地図構成」「校内の地図構成」「学校内の地図構成」「学校周辺等の地図構成」を白杖使用の技術と同時に指導する指導内容・方法を、幼稚部幼児、小学部児童、中学部生徒、その後は高等部生徒に指導しました。

III 視覚障がい教育の専門性の整理

私は、時代的にも恵まれていました。それは、奉職2年後から養護・訓練(自立活動)という新領域が教育課程として位置付けられ、したがって、この専門家が誰もいなかったことや旧北海道札幌盲学校に奉職したおかげで、幼稚部幼児から高等部専攻科の中途失明の方々まで、幅広い年齢層、発達段階の方々に接して、主に点字触読や白杖歩行等の視覚障がい児等に係る主要な課題解決が職務の使命として担うことになったからです。

1 点字触読指導の専門性

奉職2年目には、中途失明の方々が点字触読で困っているのを知り、どうしたら容易に触読ができるようになるかを、倉庫で眠っていた各種文献を調べて学ぶことができました。その結果、1966年「盲心理研究第14巻」に、瀬尾政雄先生が東京教育大学付属盲学校小学部1年生4名の点字常用児の点字清音46文字の触読調査を5月3回、6月3回、7月3回行った結果を3段階に整理した難易度分類表を見つけました。私は、小学部1年生が触読が可能になる順に点字を指導

すると容易に覚えることができると考え、その後の札幌盲学校での指導実践結果をも考察して、点字触読の難易度別に5段階分類した指導法を工夫した鈴木式点字触読指導法を創案しました。

1段階	あ	い	う	え	お	か	き	く		
2段階	こ	け	こ	け	こ	け	こ	け	こ	け
3段階	た	て	た	て	た	て	た	て	た	て
4段階	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち	ち
5段階	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ

図6 鈴木式点字触読指導法 難易度別5段階分類

2 白杖歩行指導の専門性

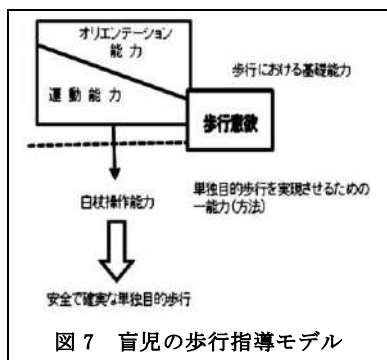


図7 盲児の歩行指導モデル

盲児の単独の目的歩行能力を「オリエンテーション能力(環境構成物を自分自身との空間関係において位置付けることができる力)」と「運動能力(盲児の持っている感覚、運動能力)」の輻輳的關係で捉え、それに盲児の歩行意欲や白杖使用能力を整理したモデルを創案して、よりの確な指導が盲児個々の実態に応じて指導できるように、発達段階的に12の項目で整理した。

能力(盲児の持っている感覚、運動能力)」の輻輳的關係で捉え、それに盲児の歩行意欲や白杖使用能力を整理したモデルを創案して、よりの確な指導が盲児個々の実態に応じて指導できるように、発達段階的に12の項目で整理した。

- 1 ホテイイメージ要素
 - ① 自分の体の部位の名称
 - ② 他人の体の部位
 - ③ その場での動作
- 2 方向概念要素
 - ① 5方向
 - ② 9方向
- 3 対音源歩行要素
 - ① 前方音源
 - ② 8方向音源
- 4 音源軌跡要素
 - ① 軌跡板による操作
 - ② 交差点のモデル学習
 - ③ 軌跡ルートの認識
- 5 歩行軌跡要素
 - ① 軌跡板による操作
 - ② 認識歩行
- 6 対風、対太陽に対するの身体方向づけ要素
 - ① 対太陽
 - ② 対風
- 7 空間構成物の関係把握要素
 - ① 教室内
 - ② 校舎内
 - ③ 学校内
- 8 白杖要素
 - ① 白杖は何かを見つけてくれる
- 9 白杖操作要素
 - ① タッチ・テクニック、スライド・テクニック、ショート・テクニック
 - ② ダイアガナル・テクニック
- 10 歩行標識と点地図作成要素
 - ① 学校周辺
 - ② 地域
- 11 認識歩行要素
- 12 雪路白杖操作要素

図8 盲児の歩行指導内容の整理

盲児の指導に必要な欠くべからざる専門性としての「点字触読」指導と「白杖歩行」指導の専門

性は、盲学校に奉職して、10年目にはほぼ形作られたものになり、その後、雪道の歩行の研究の成果も整理して、米国の視覚障がい教育・福祉等の専門紙 *Journal of Visual Impairment & Blindness* に1985年 *Winter Traveling in Hokkaido Land Japan*、1986年 *Evaluating Methods for Teaching Orientation and Mobility with Sonicguide* を発表した。当時の日本の視覚障がい教育界では本誌に2編が取り上げられたのは初めてであった。これもすべてが、児童生徒の早朝、夜間指導時の協力と寄宿舎等に勤務する職員の方々の協力があつたからと感謝している。

IV 視覚障がい教育専門性の海外での交流

1 韓国との交流

2009年8月、日韓知的障がい者サッカー大会が、札幌市で開催された折、韓国知的障がい者サッカー連盟会長(金源慶韓国体育大学教授、通訳は金日明光州大学教授)等と特殊教育について懇談する機会があつた。



図9 韓国国内での講義地

日本と韓国は、障害者権利条約に署名した後の障がい児教育体制をどうするのかなどの関心が高い時で、同年10月開催の韓国特殊教育学会秋季大会で私が日本の特別支援教育体制等について講演することになった。この

機に、国立ソウル盲学校と光州女子大学でも視覚障がい教育や特別支援教育についての講義を行った。この後、韓国には、2019年までの約10年間で、約20回、韓国に行き30数回、大学、学会、盲学校等で講演・講義を行っている。

鈴木老師45年前(民國62年)即曾至南大與特教師交流、因緣際會下、今年3月鈴木老師再度來台、會晤了當年協助的前教育部特教小組執行秘書韓繼媛、鈴木老師原本希望能拜訪當年南大的良師、然當年首師班的古萬喜老師已作古、在韓繼媛先生的協助下、卻促成鈴木老師與本校的再次交流的機會。

図10 台湾への返礼講義

2 台湾との交流

私は、2017年、台湾高雄に旅行した折、昔この地でお世話になった古萬喜先生を探した。

先生は、すでにご逝去されおり、お会いすること

はかなわなかったが、その教え子の林萃蘋先生（高雄市立特殊教育学校勤務）とお会いすることが出来た。この教師から、45年前、台湾でご指導頂いた韓継綏先生につながり、台湾での講師の依頼が参りました。

3 モンゴル及びタイとの交流

両国との交流は、2年間、視覚障がい教育研修支援を行った韓国江原明震学校(盲学校)との縁によるものである。同校は、ユネスコスクール(ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念(「教育や科学、文化の振興を通じて、戦争の悲劇を二度と繰り返さない」)を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校)として、特にアジア諸国の盲学校と交流していることから、モンゴル・ウランバートルの国立第116番学校(盲学校)、またタイ・バンコク盲学校とのつながりが深く、両校の校長は江原明震学校も視察している。

私は、江原明震学校で国際支援を担当している李政翰先生と、2017年2月、仁川国際空港で合流して、国立第116番学校での視覚障がい教育や超音波を活用した環境把握等について3日間の研修講義をおこなった。通訳は、1日1万円で、トヨタに勤務する女性にお願いした。

また、タイのバンコク盲学校へは、一人でバンコクに行き、スワンナプーム空港でバンコク盲学校が依頼した方と合流して、ホテルに向かい、次の日にバンコク盲学校で研修講義を行った。この時の通訳は、バンコク盲学校を卒業して官庁に勤務している女性と日本企業に長く勤務されて定年退職した男性が行った。この時は、音声通訳器「ポケトーク」がとても役立った。

この時ほど、ポケトークの有難味が身に染みたことはなかった。

V 人生100年時代に向けた人生設計を

私は、今年6月に満75歳になりました。厚生労働省発表の2020年版第23回生命表(完全生命表)では、75歳の平均余命は12.54歳、つまり私の場合は、平均として87歳まで生きていることになるようです。

この高齢者の生き方に関して、ニッセイ基礎研究所生活研究部 上席研究員・ジェロントロジー推進室兼任の前田展弘氏は、「人生100年時代の

働き方・活躍の仕方とは？」として、次の図を提示して、人生100年に対応した意義ある生き方の設計をするように勧めており、私はこの考えを基にして、自分が盲児や教師時代に培うことが出来た専門性を活かしていきたいと考えております。

<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=66205?site=nli>

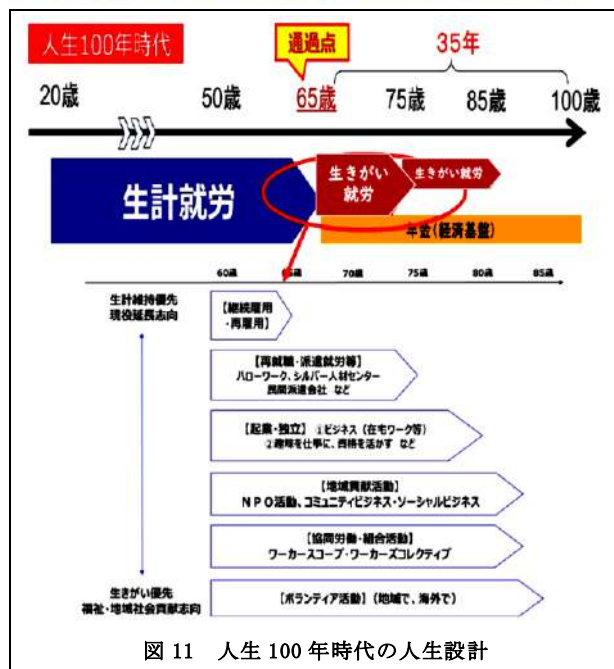


図11 人生100年時代の人生設計

VI おわりに

今般、自身の教師に奉職してからの専門性を身に付けるまでの経緯と専門性を活用した海外交流を整理することが出来た。この整理の中、多くの盲児等との出会いや、同じ思いの教師等の方々のお陰で、今の自分があることが分かった。

私は、今後も健康に留意して、もし明日佳グループ小野寺眞悟氏に雇用継続をしてもらえらば、「生きがい就労」をしつつ、「地域と海外へのボランティア活動」に、より一層、心を傾け、人生100年を目指して努力したいと思っています。

- **生きがい就労**
 - ・障がい児スポーツの専門性を活かした「公益財団法人小野寺バラスポーツ振興会事務局長」としての道内特別支援学校等への各種スポーツ支援の活動
- **国内ボランティア活動**
 - ・一般財団法人日本ライオンズ主催の全国特別支援学校フットサル大会事業の推進支援の活動
 - ・一般財団法人日本ライオンズ主催の寺子屋事業の全国8地域での児童養護施設への支援を行う各地域NPO法人との調整・推進支援の活動
 - ・視覚障がい特別支援学校及び大学等での視覚障がい教育の充実寄与に係る支援の活動
- **海外ボランティア活動**
 - ・韓国及び台湾、モンゴル、タイ以外のインドネシア及びフィリピン等の東南アジアでの視覚障がい教育の充実寄与に係る支援の活動
 - ・韓国大学生及び台湾福祉系高級中学校卒業生の明日佳グループ介護施設へのワーキングホリデーに係る支援の活動